

# 核兵器廃絶をめざす 富山医師・医学者の会

No.51  
会報

富山市桜橋通り6-13  
TEL 076-442-8000  
世話人代表 金井英子

## 県内すべての市町村議会で国への意見書を！

2019.11.16 非核富山県宣言 20周年記念シンポジウムを開催



シンポジウムの司会を務めた  
当会世話人 山本美和氏

昨年（2019年）11月16日、核兵器禁止条約の実現に向けたシンポジウムが、富山市の高志会館で開催されました。参加者は93人。「非核の政府を求める富山の会」「富山県被爆者協議会」「核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会」「原水爆禁止富山県協議会」の4団体が、7回の打ち合わせを重ねて取り組みました。

### 核兵器禁止条約の批准を求める 国への意見書を

1999年に富山県議会が「非核平和富山県宣言」を決議してから20年を迎えた今日、国連で核兵器禁止条約が採択されるなど、世界の核兵器廃絶への世論は高まっています。しかしながら唯一の核兵器による被爆国である日本政府は、この条約の批准に背を向けています。このシンポジウムの開催趣旨は、日本政府に対し条約批准をうながす意見書を決議するよう、県内市町村議会で働きかける契機にしよう

というものです。

はじめに4団体の代表からそれぞれの活動紹介が行われたあと、日本被団協事務局次長の藤森俊希氏が講演しました。次に県被爆者協議会の小島貴雄会長が配布された文書「意見書採択の陳情への呼びかけ」への賛同を参加者に訴えました。

4団体としては、2020年6月議会に向けて、多くの賛同署名を携えて各自治体や議会に要請行動を行うとしています。

### 先生方の賛同が地方議会を動かします

私たち核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会の世話人会は、当会の会員はもとより核兵器廃絶を願うより多くの先生方の賛同署名を当該市町村に届けたいと思います。この会報に同封されている賛同書にサインのうえ、Faxにてご返送いただければ幸いです。

- 藤森俊希氏の講演要旨……………2～3
- シンポジウム主催4団体の発言から……………4～5
- 富山県宣言、非核平和都市宣言（1989・入善町）、平和祈念像建立の趣旨（1987・高岡市）……………6
- 追悼・アフガンに命を捧げた中村哲医師……………7

# 私の被爆体験と2019 国連に署名を提出



日本  
原水爆被害者団体協議会  
事務局次長  
**藤森 俊希氏**

講演はまず、藤森さんが用意したDVDの放映から始まりました。

## 私の被爆体験

(藤森)「1歳での被爆ですからはっきりと記憶があるわけではありません。しかしその情景が頭に浮かびます。いつも8月6日になると、母親が原爆投下当時のことを涙ながらに話してくれたからです。あんなら二度とあのような目にあわせたくない、と。」

(ナレーション) 藤森さんは1944年、9人兄弟の末っ子に生まれました。そして45年8月6日、広島を、藤森さんの家族を原爆が襲ったのです。

朝から調子が悪く、背負われて病院に行く途中、母親は飛行機の音だけでB29だとわかったそうです。その瞬間、耳をつんざく音と爆風。爆心地から2.3キロの場所で、吹き飛ばされた土手の下から這い上がって街を見渡すと黒々とした大きな雲と火の海。地獄の光景です。直撃は避けられたものの藤森さんはひどい火傷で、目鼻口だけ出した全身包帯姿ですぐに死ぬと思われていました。家族のうち8人が被爆し、4女の姉は爆心地から400mの場所でした。



原爆を投下したエノラゲイ (B29 爆撃機)

(藤森)「姉を探しに行っても遺体を見つけることができませんでした。おそらく川に入って流れて行ったのではないかと。何千人という人が遺体も見つからないままだったと思います。」



被爆直後の大正橋付近 (被爆体験証言・田川康介氏：広島平和記念資料館)

(ナ) 街は変わり果て、暑い夏で遺体にハエが飛び交いウジがわき、耐えられない悪臭が街を包んでいました。被爆当時広島には35万人の市民や軍人、その中には当時の植民地であった朝鮮や台湾、中国から強制的に徴用された人々も大勢いました。

(藤森)「9月6日にファレルという米軍の原爆責任者が、『現在、原爆で死ぬべき者はすべて死んで、後遺症で苦しんでいる者は皆無だ』という声明を海外特派員向けに出しました。そのため、それ以後被爆者は放棄されてしまうことになったのです。」

(ナ) 原爆による死亡者数は現在も正確にわかっていませんが、1945年12月末までに14万人が亡くなったと言われています。そして、その後もなお原爆は被爆者に苦しみを与え続けているのです。

また2世にも原爆の影響が広がっていきました。法律で被爆者には健康手帳が交付され、医療の本人負担分が原則免除されますが、2世には健康診断のみなのです。藤森さんの姉の次男は7歳のとき白血病で亡くなりました。



藤森氏の甥・史樹さん (享年7歳)

(藤森)「被爆した家族の中でもごいことが起きている。それに対して日本政府もアメリカも原爆とは関係がないという。これに私は言いようのない憤りを感じます。」

## 核軍縮から核兵器禁止条約へ

(ナ) 1946年、国際連合は核兵器の廃棄を提案するための原子力委員会の創設を決議しますが、米ソ対立で行き詰まり、東西冷戦もあって次々と核保有国が増えていきました。

1970年、これ以上核保有国を増やさないということをめざし核不拡散条約(NPT)が発効しましたがこれにも大きな問題点がありました。

(藤森)「NPTはもともと歪んだ条約です。5つの国の核保有を肯定し、それ以外の国との差別によって優位を得ようとするのは絶対におかしい。まったくの不平等条約です。そのことを心に据えておかないと前に進めません。もし最初に作ったアメリカが、平和のため核兵器をなくす先頭に立つよ、と言えば世界はその方向に進むと思います。」

(ナ) 2016年に核兵器禁止条約の制定を求める署名運動がスタートし、その翌2017年、歴史上初めて法的に核兵器を禁止する条約が誕生しました。国連の条約制定交渉の場でヒバクシャの思いを込めた藤森さんの演説は大勢の胸を打ちました。こうして被爆者を先頭にした長年の運動、非核の立場に立つ各国政府、そして国連がともに国際政治を動かしたのです。



国連本部で行われた核兵器禁止条約交渉会議で演説する藤森氏

(藤森)「署名運動をしている時は、まさか次の年の2017年に禁止条約が決議されるとは思っていませんでした。2015年のNPT再検討会議で合意できなかったけれども、非保有国はへこたれなかった。2年間ですごいエネルギーだったと思います。」

「この条約は50カ国以上批准すると国際条約として認められます。現在は33で、あと17。来年(2020年)5月のNPT再検討会議は、50を突破して迎えることができるよう、日本政府に働きかけていきたいです。」

(ナ) 条約が採択されたその年、核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)がノーベル平和賞を受賞しました。この動きの中で忘れてならないのは女性の活躍です。交渉会議ではコスタリカ大使のエレン・ホワイトさんが議長を務め、国連事務次長で軍縮上級代表の中満泉さんが補佐しました。授賞式では

ノーベル委員会委員長、ICAN代表、被爆者代表、登壇者全員が女性です。条約前文にも女性の役割が記されています。

地球の安全を考えると核兵器はなくすべきです。世界から核の脅威をなくし二度と繰り返さないために、これからも藤森さんの活動は続きます。

## NY国連本部に署名を届ける

DVD上映のあと、藤森さんは2019年10月、国連本部にヒバクシャ国際署名を届ける活動に参加したことについて話を続けました。

10月9日に日本政府代表と懇談しました。相手は高見澤将林(のぶしげ)国連軍縮会議日本政府代表部大使(当時)です。防衛畑出身の高見澤氏は、条約交渉会議が始まった2017年3月27日、国連総会議場で『建設的で誠実な形で交渉に参加することは困難だと言わざるを得ない』と発言した人です。それ以降条約を検討する会議に、日本政府からは誰一人出席しませんでした。



高見澤日本政府代表部大使(当時)との懇談(10/9)

その日の懇談でも彼はにこやかでソフトな対応なのですが、言っていることは政府としてこの条約はやらないと、唯一の被爆国にあるまじき許しがたい発言を繰り返していました。懇談後の記念写真を見ると私だけが苦虫を嘔み潰したような顔でした。

10月10日は、国連本部内でオーストリア国連大使と懇談です。私の隣の女性はピースボートの畠山澄子さん、その隣が女優の東ちづるさんです。ヤン・キッカド大使は被爆者のたゆまぬ努力に敬意を述べ、『オーストリアは核兵器をはじめ非人道的な被害をもたらす兵器を許さないという、その議論の最先端に常に立っていたいと思っている』と発言しました。



オーストリア大使との懇談(10/10)

その日の夜、国連近くの教会で『被爆証言と音楽の夕べ』というコンサートが催されました。私の証言を畠山さんが同時通訳してくれました。』

「そして11日、写真は一連のイベントのハイライト、1千万を超えるヒバクシャ国際署名の目録を手渡しているところです。左は国連総会第1委員会のヨレンティ議長（ボリビア国連大使）、隣は日本人女性初の国連事務次長・軍縮担当上級代表の中満泉さんです。



ヒバクシャ国際署名の目録を提出（10/11）

ヨレンティ議長はこう述べました。『この場所で藤森さんと出会えたことはとても嬉しい。ボリビアは今年の8月6日に核兵器禁止条約に批准したことから、自分の国に誇りを持っている。核兵器は人類の存亡に関わるものであるから、廃絶を目指しこれからも行動していく。』そして議長は『ぜひ僕にもサインをさせてほしい！』と、その場で署名してくれました。

中満軍縮上級代表は、『いつも署名を提出しにニューヨークまで来てくださってありがとうございます。核廃絶や軍縮を前に進める上で被爆者の証言がとても重要です。藤森さんも身体に気をつけて、また日本でお会いしましょう。』と励ましてくれました。

## 政府の「核廃絶」国連決議案の問題点

最後に、私たちが帰ったあとの10月20日に、日本政府が国連総会第1委員会に提出したあらたな決議案の内容が、これまでのものより大幅に後退していることについて話します。

日本政府の決議案は、これまでの核不拡散条約（NPT）再検討会議の合意事項に関する記述の大半を削除し、北朝鮮の核・ミサイル問題については大きく取り上げ、核兵器の廃絶を『究極のゴール』として先送りしています。核保有国による核廃絶の『明確な約束』という文言は削除され、核使用の非人道性に『深い憂慮』を示す記述も消え、核兵器禁止条約にはまったく言及していません。

日本政府は1994年以降、毎年核兵器廃絶決議案を提出し、採択されてきましたが、2017年の核兵器禁止条約成立以降、賛成国が減ってきておりアメリカも拒否しています。政府は核保有国との橋渡しの役割と言いますが、これら後退した内容では唯一の戦争被爆国である日本の存在意義が問われるものといわねばなりません。

## 11/16 シンポジウム主催団体の発言から

### 非核の政府を求める富山の会

代表世話人 水谷 敏彦

非核の政府を求める富山の会の結成は1988年、全国の会はその2年前です。主な活動は非核5項目の実現です。5項目とは、核兵器廃絶を求めること、非核三原則の厳守、戦争につながるすべての措置に反対、被爆者援護法の制定、世界との連帯、の5つです。

非核平和宣言はこれまで県を含めて15自治体が宣言しています。注目されるのは入善町と高岡市。入善は宣言碑を作っています。高岡の宣言は県内でもっとも早く（86年）、モニュメントに記載されて



いる内容も「すべての国の核兵器の廃絶を全世界に強く訴える」とあり、私たちの願いがそのまま刻んであります。（入善町と高岡市の宣言文はP6に）

最近では自治体首長への非核イベント開催要請や、被爆者国際署名に取り組んでいます。現在の大きな課題は、核兵器禁止条約発効のための取り組みです。条約前文の「ヒバクシャ」の位置づけや第1条の禁止の内容はすばらしいものですので、これらを訴えながら今回の意見書決議の採択に向け、皆さんとともに頑張りたいと思います。

### 核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会

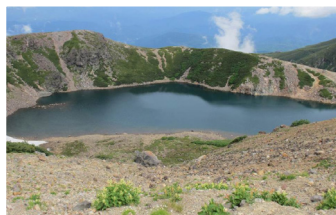
世話人代表 金井 英子

私は核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会の3代目の代表世話人です。会は30年前、核戦争防

止国際医師会議（IPPNW）がノーベル平和賞を受賞したことを契機に結成されました。これまで人の命を救う医師の立場から放射線被害の恐ろしさを訴え、核兵器廃絶を唱えてまいりました。

毎年夏には被爆者の方々に被爆体験を話していただいたり、映写会を催すことで、一般市民の方々に核兵器の恐ろしさ、理不尽さを訴え、核兵器廃絶の世論形成を目指しています。今年(2019年)は「夕凧の街 桜の国」という映画を上映し、5歳の時に長崎で被爆された日本被団協事務局長の木戸季市氏に被爆体験をお話いただきました。

ところでこの写真は私が数年前に登った山のコマクサと山頂の池です。御嶽山でした。その7週間後に噴火したのです。こちらの写真は今年の御嶽山、白くなっているのは池の跡です。一面にあったコマクサはガレキの下になり、多くの方が亡くなりました。これを見たとき、広島原爆資料館のガレキを思い出しました。火山の噴火は私たちにはどうしようもないけれども、核兵器によって世界がこんな景色に絶対にならないよう力を尽くさなくてはならないと思っています。



噴火前の御嶽山 →  
噴火後の // ↓



## 富山県被爆者協議会

会長 小島 貴雄

私どもの会は今年で60年目を迎えます。それを記念して7月に私たちは広島に慰霊の旅を行いました。来年はこれまでの被爆体験集『叫び』に新たな人を加え、再編集して発刊したいと考えています。

協議会は、かつては200名近くの被爆者が在籍していました。しかし今年3月末時点では48名、それ以後3～4名の方の訃報が届いております。このままでは会が継続できないと私たち2世に協力要請があり、私も1世の方々の思いをぜひ伝えたいという気持ちで引き受けました。

父は96歳で、最近しきりに74年前の後悔を口にします。父は江田島で船舶特攻の訓練をしていて



8月6日を迎え、12日までの6日間広島市内で被災者の救護にあたりました。救護にあたった仲間の中には、1カ月もたたないうちに体調を崩し原爆症といわれる症状で亡くなった方や10数年も病気で苦しむ方々もおられます。幸い、父は症状が現れず今日まで生きておりますが、その父が、あの時救いを求める人たちに水をあげられなかった、軍の命令とはいえ死の間際にいる人に、手にした水筒から一杯の水もあげることができなかったと、今も悔やんでいるのです。いま平和記念公園には絶え間なく水が流れていますが、あの時必死に水を求めている被爆者に存分にあげようじゃないかと溢れているんですね。その思いを受け継いだわれわれ2世が世界に伝えて、核兵器をなくそうという署名をより多く集めたい、このシンポジウムがその契機になればと思っています。

富山県では20年前に非核平和宣言が採択されました。父は、これで富山県も核兵器から離れた世界に一步踏み出したな、と喜びを語っておりました。しかしその後は停滞しています。全国で430余りの自治体が、核兵器禁止条約の批准を国はすすめてほしいという決議をしていますが、富山県はまだ一つもありません。それを父は寂しいと嘆いております。私たち被爆2世はその思いを受け止め、より広め高めていきたいと思っています。今後とも皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

## 原水爆禁止富山県協議会

高岡市原水連事務局長 松田 理恵子

なぜ私たちは高岡原水協と言わず「原水連」と名乗っているのか。その事情についてお話ししておきます。

第1回原水爆禁止世界大会が開催された1955年に日本原水協が発足し、その2年後に高岡市は堀市長を会長とした準備会をへて高岡原水協を発足させました。以後、1965年の世界大会が分裂したあとも高岡原水協として高岡市も関わっているような活動をしてきました。

たとえば3.1ビキニデーや8.6、8.9に署名活動、平和チャリティー色紙展（ウイングウイング高岡）や被爆写真パネル展（市役所ロビー）の開催です。原水爆禁止世界大会へも、市の補助やチャリティーによって毎年派遣し、今年は私も参加しました。平



和の行進でも市議会や市教委から激励の挨拶をいただけます。

これに対し高岡原水連は1987年に発足し、学習会を中心に活動してきました。県原水協にも加盟し6.9行動を大切にしています。桜や紅葉の古城公園でヒバクシャ署名を楽しく訴えたり、今年は原爆パネルを丁寧に使った学習会や映画会「西から昇った太陽」の上映に取り組みました。

ところで署名活動では高校生が協力的で、中学校の修学旅行で広島に行ったことなど話がはずむこと

があります。そこで気になっているのは、これまで高岡市の修学旅行先は広島での平和学習ですと続いてきていたのですが、新幹線が通ってから東京方面に流れる傾向が出てきたことです。私が危惧しているのは、この傾向が続いていったら子どもたちは修学旅行以外で行くことはめったにないので、広島を知る機会がなくなってしまうことです。また広島平和学習のノウハウを持った教員も減ってきます。そうならないよう、何らかの形で働きかけていきたいと思っています。

### 平和祈念像建立の趣旨（高岡市）

1986年12月17日高岡市議会に於いて市民の願いを込めた「平和都市宣言」が可決された。ここに核兵器廃絶の願いを刻み祈念像を建立するものである。

1. 高岡市はすべての国の核兵器の廃絶を全世界に強く訴える。
2. 高岡市は、国是である「核兵器を作らず、持たず、持ち込ませず」の非核三原則を将来にわたって厳守する。
3. 高岡市は、戦争の悲惨さを子々孫々に伝え、平和を守る行政を行う。

1987年8月1日  
平和祈念像建立委員会 会長 堀 健治

### 非核平和都市宣言（入善町）

核兵器を廃絶し世界の恒久平和を実現することは、人類共通の願いである。

入善町は、憲法にうたわれている平和に生きる権利を確立するためここに非核平和都市宣言をおこなうものである。

- ・入善町はすべての国が核兵器を早急に廃絶することを全世界に強く訴える。
- ・入善町は国民の願いである「核兵器を作らず持たず持ち込ませず」の非核三原則を将来にわたって厳守する。
- ・入善町は戦争の悲惨さを後世に永く伝え平和を守る町づくりをすすめる。

1989年9月 入善町  
入善町議会

### 「非核平和富山県宣言」に関する決議

核兵器を廃絶し、恒久平和を実現することは、世界で唯一の被爆国である我が国はもとより、人類共通の願いである。

我が国は、日本国憲法に基づき、「核兵器をつくらず、持たず、持ち込ませず」の非核三原則を国是としている。

本議会においても、平成7年6月の「核実験反対、核兵器全面禁止・廃絶を求める意見書」、平成8年6月の「中国の核実験に抗議し恒久平和の実現を求める決議」、平成10年6月の「核拡散防止体制の強化と核実験の禁止、核兵器の廃絶を求める意見書」を可決し、繰り返し核兵器の廃絶と平和を願う意思表示をしてきたところである。

しかしながら、今日なお、地球上には核兵器が厳然として存在し、人類を破滅に陥れる核兵器の脅威は依然として続いている。

もとより、世界の平和と繁栄のためには、具体的な行動を積み重ねていくことが重要であり、来るべき21世紀に向かって、よりいっそう国際的な相互理解、相互信頼を確固たるものに構築していくことが必要である。

今後とも、県民の生命と安全の確保のため、一日も早い核兵器の廃絶と世界の恒久平和の実現に向けて、一層の努力をしていかねばならない。

富山県議会は、ここに、富山県民とともに、核兵器の廃絶と世界の恒久平和の実現を願い、「非核平和富山県」の宣言を行う。

以上、決議する。  
平成11年12月20日  
富山県議会



### 会報2000年8月5日号から引用

富山県議会は昨年12月20日、「非核平和富山県宣言」に関する決議を全会一致で可決しました。これには「非核の政府を求める会」などが数年前よりねばり強く働きかけてきており、去る11月6日にもシンポジウムが開かれました。

核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会では、昨年より会員に対し富山県宣言を求める陳情人への参加を呼びかけてきました。さらにこのシンポジウムへの賛同募金への協力を募ると、26人の会員から合計13万円が寄せられました。

シンポジウム当日は、常任世話人である高野昇治先生と片山喬先生が出席し、司会の求めに応じて設立十周年を迎えた「医師の会」の活動を紹介しました。

# 追悼・アフガンに命を捧げた中村哲医師

## 2010年6月に富山で講演



「なぜ医者である私が土木工事をやっているか。大干ばつの時、子どもが大勢死んでいった。飢えや渴きを治さないと病気は治せない。あのとき水さえあれば、9割以上は死ぬことはなかったと思う」

「アメリカの攻撃はピンポイント攻撃でテロリストだけを攻撃する人道的なものと言われた。しかし私たちが見たのは無差別爆撃だ。犠牲になったのはほとんどが子ども、女の人、老人、こういう逃げ足の遅い人たちが犠牲になった。」

「今、世界で『金さえあれば何でもできる』という迷信、『武器さえあれば身が守られる』という妄想が蔓延している。私はあちらに25年間いて悟ったことがある。つまりモノがなければいほど人々は楽天的になる、逆に、持てば持つほどそれを失うまいとして暗くなるのではないかと。」

(2010年7月15日号 当国会報より)

- 1979 ソ連軍がアフガンに侵攻
- 1984 ハンセン病治療で難民キャンプに山岳地帯で診療所建設
- 1989 ソ連軍撤退、民族対立・内戦激化
- 1994 タリバン台頭
- 1998 ペシャワールに基地病院建設
- 2000 井戸掘り開始 **大干ばつ**
- 2001 **同時多発テロ**
- 2002 **米軍駐留開始・カルザイ暫定政権**
- 2003 **クナール川用水路建設開始**  
**タリバンの勢い回復**
- 2008 日本人の青年が襲撃される
- 2009 ガンベリ砂漠横断水路の建設開始
- 2010 **富山で講演**  
**空爆強化、反米思想の広がり、治安悪化**
- 2019.12.4 凶弾に倒れる

「日本は、軍事力を用いない分野での貢献や援助を果たすべきなんです。現地で活動していると、力の虚しさ、というのがほんとうに身に沁みます。銃で押さえ込めば、銃で反撃されます。当たり前のことです。でも、ようやく流れ始めた用水路を、誰が破壊しますか。緑色に復活した農地に、誰が爆弾を撃ち込みたいと思いますか。それを造ったのが日本人だと分かれば、少し失われた親日感情はすぐに戻ってきます。それが、ほんとうの外交じゃないかと、僕は確信しているんですが。」と語っていた中村哲氏。(2008年マガジン9)

氏が富山で講演された以後、米軍は空爆を強化し、一般人の犠牲者が増大したため排外思想が広がり、治安が悪化したという。残念でならない。

### 中村哲先生を偲んで

世話人代表 金井 英子

毎日中村哲氏のニュースが出る度に泣いてしまいます。

2010年の6月、私が骨髄移植を受ける直前に小杉で講演会がありました。私は主催者側の一員として閉会のご挨拶をした事で、しばらく中村哲先生とお話できました。

無口で静かな方でした。私が骨髄移植を受けると話しても、励ましの言葉も慰めの言葉もおっしゃらず、黙って私を見ておられました。あの様な方は初めてでした。今、初めて先生のお心が見えた感じがします。

「貴方は恵まれた医療に浴し、病と闘う強さを持っている。私の言葉は何も要らない」と。人の印象に残るのは言葉ではない。深い眼差しと沈黙からくる存在

感なのだと感じました。そして中村先生と握手した時の温もりは今も私の手に残っています。多くの方々の方々の心の中で今も生きておられます。



富山講演を控えた加藤登紀子さんも飛び入り参加

# 「日本政府へ核兵器禁止条約の批准を 求める意見書」採択への賛同を

核兵器禁止条約は、開発、実験、生産、製造、取得、保有、貯蔵、移転、使用または使用の威嚇にいたるまで、核兵器にかかわるあらゆる活動を禁止しています。まさにこの条約は日本の国是である非核三原則「作らず」「持たず」「持ち込ませず」を現実化するものと言えるのです。

しかし残念ながら日本政府は、唯一の被爆国という立場でありながら核兵器禁止条約に背を向けています。それに対し、日本政府に核兵器禁止条約の署名・批准を求める県・市町村議会の意見書採択が、全国で広がっています（2020年1月23日現在、436自治体）。

1999年12月に採択された『非核平和富山県宣言』から20年を経た今日、核兵器禁止条約の署名・批准を求める意見書を富山県議会と各市町村議会が採択されるよう取り組んでいきたいと思ひます。

医師・歯科医師の賛同署名は、地方議会に対しておおいに影響力を発揮します。ぜひ同封の賛同書にご署名いただき、FAXで事務局までご返信下さい（お電話でお伝えいただいても結構です）。

なお、賛同書が見あたらない場合は、このページをコピーして使用してください。

連絡先 FAX (076) 442-3033  
電話 442-8000

<賛同書>県内市町村議会に「日本政府へ核兵器禁止条約の批准を求める意見書」採択を求めます

氏名 \_\_\_\_\_

## ローマ教皇が天皇と会見、核廃絶にもふれる



ローマ・カトリック協会の頂点に立つフランシスコ教皇は昨年11月24日、長崎と広島を相次いで訪問して核兵器廃絶を訴えました。

「戦争のための最新鋭の兵器を製造しながら、どうして平和について話すことができるのか。核戦争の脅威で威嚇することに頼りながら、どうして平和の提案ができるだろうか」

「核兵器のない世界は可能であり必要不可欠なことだとの確信をもって各国の政治指導者に求める。核兵器は、国際的また国家の安全保障への脅威から私たちを守ってくれるものではない。そう心に刻んでほしい」

教皇は翌25日皇居を訪れ天皇陛下と会見されました。教皇は「9歳の時、両親が長崎、広島の原因のニュースを聞き、涙を流していたことが心に強く刻まれています。私はこのような気持ちを込めて、メッセージを発出しました」と述べ、陛下は「教皇が人々の幸福と世界の平和のために精力的に活動されていることに深い敬意を表します」と応えました。

### 編集後記

●「銃を持った人間から自分と家族を守るのは銃を持った善人だけだ」(NRA 米ライフル協会副会長)  
銃で毎年3万人以上が死亡し、その医療費が5億ドルを超えるアメリカ。一般人が銃を必要としない日本人からすれば、NRAの言い分は銃を持ち続けたいための方便に聞こえる。

●「核の脅威がある中で抑止力を維持し、国民の生命、財産を守り抜く責任がある」(安倍晋三)

この二つの主張は本質的に同じである。アメリカの銃規制がなかなか進まないように、核依存国の核禁止条約批准は一筋縄ではいかないのだろう。

●しかし日本は一般人が銃で傷つくことはほとんどない社会を実現している。今こそ核禁止条約発効に向けて先頭に立つべき時ではないか。(S・M)